
ボクのイバシヨ

Y・H

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクのイバシヨ

【Nコード】

N2272C

【作者名】

Y・H

【あらすじ】

僕の名前は八神優。よく女の子に間違われるけど、ちゃんとした男です！！そんな僕には記憶がありませんでした。でも、周りの人達のおかげでそんな事にはめげずに過ごせました。ある日、両親が「旅に行ってくる」と言い失踪。母さんの親友で学園長をやっている叔母さんに僕は引き取られ、叔母さんのやっている学園に入る事にもなりました。しかし、そこから僕の日常が壊れていくのです。なんと、叔母さんの学園は…女子校だったのです！叔母さんに質問すると「優ちゃんなら可愛いから大丈夫ー♪」なんて呑気に言っ

いる。
はあ…どうなっちゃうんだろ？僕の学園生活…

僕には中学生になる前の記憶がない。自分の名前すら分からなく途方にくれていた僕を拾ってくれたのが今の両親だ。優しく、根っから良い人達なのだがちょっと個性的？な性格で僕は、いつも振り回されている。

そんな両親が「旅に行ってくる」と言葉を残し突然失踪してしまった。僕は母さんの親友で何処かの学園の理事長をやっている人にお世話になる事になった。叔母さんは昔から僕に色々してくれてとても良い人だ。今回だってそうだった、受験生の僕が何処の高校に入るか悩んでいると「私の学園に入ってみない？」と進めてくれたのである。こんなチャンスはそうそう無いので二つ返事で了承してしまった。その時は試験なしで高校に入れるという事で頭がいっぱいだった僕は、叔母さんが悪戯っ子のような笑顔を浮かべている事に気が付かなかった：

それから、家から学園までの距離が遠いため寮に入る事になったが、僕は学園の場所や名前すら教えてもらってない。なので叔母さんに「それは、後からのお楽しみ♪」と言われ寮に入る当日まで教えてくれないらしい。

（まあ、楽しみがあっといういかー）

寮に入る当日：

荷物は既に寮の方に送っている。なので部屋にはほとんど何もない。

「優ちゃーん！ーん！ーん！！！」

「叔母さん、部屋に入る時はノックくらいして下さい。」

「叔母さんじゃなくて、亜耶あやです。」

「それで……亜耶さん何の用ですか？」

「今日は、寮に入る日でしょ？だから迎えにきたの」

「それじゃ、さっそく行きましょう」

6

車に揺られる事、30分。

「あれよ」と、おば：亜耶さんに指さされて顔をそちらに向けると、大きな建物が見えて来た。

「……風華……女子寮……？」

車が止まり最初に見えたのは寮の名前とおぼしき看板である。

「おばさ……亜耶さん」

目が怖かったのですぐに修正し、質問してみる。

「なあゝにいゝ？」

「寮って、ココですか……？」

「そうだよおー」

「ココって女子寮じゃないでしょうか？」

「そうだよー」

「…もしかして、ココに住めと？」

「そうだよー」

「僕…男なんですが…？」

「大丈夫だよー。優ちゃん可愛いしー♪」

「そういう問題じゃ」「私の学園は女子校だから仕方ないのよー♪」
「ないんですね」

「ちなみにもう入学届け出してるから他に行くのは無理だからー♪」

「そんなぁ…」

最後の言葉でトドメをさされてしまった。

そういえば、この人って母さんの親友だったなぁ。それを忘れてた
…んじゃ、抵抗してもムダ、か…

グッバイ僕の輝かしい高校生活…。ウエルカム、地獄の高校生活…。

「そんなに気に入ったからって感動しないでよー♪」

あっ…涙が…違う！これは涙じゃないんだ！汗だ！汗なんだよおー
！！

それから寮の管理している人に挨拶をすませ、部屋に案内してもらった。部屋に着くと亜耶さんは「これから用事があるからー」と言
って帰っていった。

部屋に入ってみると、意外に仲は広く綺麗だった。
管理人さんが「6時から歓迎会をするから、時間になったらすぐ来て下さいね？」と言っていたが、時計に目をやると既に…

「6時10分…？あれー？僕っていつの間に目が悪くなったんだろー？…あっ！そっかぁ、時計がズレてるだけだよねー？」

現実逃避中…

「って！？やばいいー！！！」

そう叫び扉を開け駆け出す。鍵を掛けるのを忘れたが気にしない。

歓迎会は食堂でやると言っていたので食堂を目指す。

「ラストスパートー！！！」

残り10メートルの所で、おもいきり床を蹴り加速する。が、食堂に入ってすぐ下に黄色い物が落ちていた。そんな事を知らずスピードを保ちながら突っ込む。

「すみません！遅くなりうなあー！！？」

謝りながら入ると、黄色い物を踏みつけてしまい派手に転び、机や椅子を巻き込みながら壁に激突してしまった。

「痛あー！」

涙目になりながら頭をさすって、さっき踏みつけた黄色い物を見た。

（バナナあー！！！！？…ベタだなあ……）

そこで気付く、周りが静まり返りコチラに注目していることに…

「遅くなり、すみませんでしたあー!」

立ち上がりながら謝る。だが、みんな目を見開いて口をポカンと開けている。

「あのー…?」

誰も反応してくれないので声をかけてみたが効果なしだったようだ。

（こうなったら、無理矢理話を終わらせて部屋に戻るかな…）

「ええっと、僕の名前は八神 優です。これからよろしくお願いします。それじゃ、さよならー!」

そう言って食堂から飛び出していった。

第0話 叔母さんの策略!?(後書き)

このたびは、ボクバシヨを読んで頂きありがとうございます。更新はなるべく早くしますが、期待はしないでください；感想をくれたら嬉しいです！お願いしまーすw

第0. 5話　ともだち!?! (前書き)

まだまだ未熟なもので文がまとまらず長々となっていました(汗)

第0. 5話　ともだち!?

部屋に着き、一息つく。

「はぁ…」

（さっきは大変だったなぁ…。遅刻しちゃうしバナナ踏んじちゃうし…ベタだよなぁ……。）

「まあ、いっか。お風呂に入って忘れようー」

この寮には大浴場の他に各部屋専用のお風呂が付いている。洗面所やトイレも備え付けられているので、女の子にバッテリーあうという危険は起きなくて安心出来る。

（でも、大浴場に入ってみたいなぁ…）

そう考えながら脱衣所に入ってしまった。

30分後、お風呂から上がりパジャマに着替え、ベットへ倒れるように横になった。
すぐに眠気が襲ってくる。

（今日は色々あったからなぁ…明日はどうなるのかな…?）

そう考えてから瞼を閉じ、夢の世界に身をゆだねる。

[illegible]

食堂に着くと、みんな話しに華を咲かせ賑やかだった。が、僕が食堂に来たのに気が付くと静まり返ってしまった。

（なんかみんなこっち見てるよ…。やっぱ昨日のが駄目だったのかな…？）

そう考えていると、黒髪で髪型がショートの活発そうな女の子が近づいて来た。

（なんかヤバそう…。もしかしてバレちゃった？明日から学校なのに…。…ってか、バレない方が無理だって！！）

「あたしの名前は、『加藤^{かとう} 奈津実^{なつみ}』ヨロシクね？」

そう言って手を突きだし、握手を求めてくる。

「え…。？よ、よろしく…」

状況を理解出来ずにいたが、握手をしないと失礼な気がしたので一応握手を試してみた。

適当な席を見つけ椅子に座る。すると、正面の席に加藤さんが座る。

「改めてヨロシクね？八神さん」

そう言って加藤さんは、頭を軽く下げる。慌てて僕も頭を下げた。

「こ、コチラこそ、加藤さん」

「堅苦しいから、奈津実で良いよ」

「えっ…。じゃ、僕も優で良いよ」

「うん♪…ふうーん、やっぱり思った通りね」

「な、何が思った通りなの？」

（やっぱりバレたかぁー！？）

「可愛いつて思っただけよ」

「へっ…?」

(可愛いつて……………僕がぁー!?)

理解した瞬間、顔が熱くなるのが分かる。

「ぼぼぼくは、か、可愛くないよ…?」

(冷静に…冷静冷静冷静冷静冷静…)

「えいっ!」

「うひゃあ!?!」

冷静になろうとしていたボクに向かって誰かが掛け声と共に後ろから抱き付いてきた。

「うーん…良い匂い。それに柔らかくて抱き心地も最高ー♪」

「あ、あのー…?」

(この子は、いったいなんなんだ!?)

「なぁーにぃー?」

「そ、そろそろ放して貰えませんか…?」

(せ、背中に…何か当たってるよー!?)

あれっ…なんか頭がフ

ラフラしてきた……)

意識が遠退きそうになっていると、フツと身体が軽くなる。

「舞!いきなり抱き付くのは失礼でしょ!?!」

どうやら、奈津実さんがこの舞という子を引き離してくれたようだ。

「だってえー」

「だってじゃない!!」

(奈津実さんって良い人だなあ…)

「あたしも優に抱き付きたいんだから!!」

(前言撤回、どうやらこの人も僕にとっては危ない人のようだ…)

「しょうがないじゃん。可愛かったんだもん」

「確かに優は可愛いけど、だからっていきなりはないでしょ!」

「だってえー」

「だってじゃない!」

(ここは、逃げるが勝ちだ…)

そう思い、そろりそろりと食堂から抜け出す。

「ふう…」

食堂から無事抜け出す事に成功し、一息ついた。

「あのう…」

「うわぁー！ー！？」

周りに人がいないと思っていたので急に後ろから声を掛けられおもいきり驚いてしまう。

「驚かせて、すみません！」

僕に話しかけて来たのは、小柄でとても可愛らしい少女だった。その少女が今、僕の目の前で物凄い勢いで頭を下げながら謝っている。

「すみません！すみません！すみません！すみません！すみません」

（どうしよう…変な噂流れたら…。『遅刻バナナ男』なんてあだ名とか付いたら嫌だあ…。でも、今は女の子か…）

「そ、そんな事ないです！八神さんは、とても素晴らしいです！」

いきなり褒められた僕は少しの間、声が出なかった。

「あ、ありがと。佐藤さん」

無理矢理、声を出しお礼を言うと佐藤さんは俯いてしまった。

なぜ俯いてしまったか分からないから顔を覗き込んで見る。佐藤さんと僕の身長はあまり差がない（自分では、かなりショックだったりする）ので覗き込むのは案外楽だった。

「!？」

すると、佐藤さんは顔がボンッ！と音を発ててしまいそうなくらい真っ赤にして走り去ってしまった。

「なんだったんだろ…？」

佐藤さんが走り去ったのを啞然と見送った後、僕の呟きだけが響いていた・・・

[illegible]

周りを確認しても人影が見あたらない。

それから少し探検をしたが、広過ぎて迷子になりかねないので来た道に戻り部屋に戻った。

22

「なんか騒がしいような……」

部屋に無事着いたのは良かったのだが急に廊下が騒がしくなった。確かめようと扉を開けて見たが辺りは静まり返り人影がない。

（気のせいかなあ…）

扉を閉め、少したつとまた騒がしくなった。が、扉を開け確認するが誰もいない。

（よーし！こうなったら！！！）

扉を閉めると案の定騒がしくなる。

自分の気配を消し（静かにしてるだけ）扉に耳をつけ、聞き耳をたててみる。

「八神さんの部屋……」

「入ってみたいなあー！！！」

「きゃーどうしよう！？」

など色々聞こえる。

（僕に何か用なのかな？）

考え込んでいると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ここが優の部屋………ふふふ…」

「優ちゃんの部屋かあ…キヤー♪」

（やばい。やばいやばいやばい！あの人達を部屋に入れたら…）

想像してみる。会って間もないが何故かあの二人を部屋に入れたら自分にとって危険だと脳は警告してくる。

（居留守してれば、問題ないよね…）

その考えは甘かった。

なんと鍵を掛けていたはずの扉が開き奈津実さんとさっき僕に抱き付いてきた舞という人が入ってきた。その手には折り曲げられた針金2本がある。

「……………」

（これって犯罪じゃないんですかあ……………！！？）

「優会いたかったあ……………！！！」

「優ちゃ……………ん！！！」

そう言って手を広げコチラに走ってくる。

(僕は、どうすれば良いんだぁーーーーー!?)

泣きそうになっていると頭の中に手助けとも呼べる選択肢が思い浮かぶ。

1、扉から逃げる

2、ルーラを使って逃げる

3、なにがあっても逃げる

4、自害

(なに!?最後の!?諦めろってことなのーーーー!?)

こうしているうちにもタイムリミットは刻一刻と迫ってくる。

(落ち着け、僕。まず2と4はないな。ルーラって…ドラ○エじゃないんだからさ……。ここは1だ!!)

そこで止まる。

(どうやって?)

出口となる扉に近づくにはあの二人をどうにかしなければならぬ。

(それは絶対無理だぁーーーー!だって二人の体から変なオーラみたいな出てるんだもん!!!僕にはあの二人を止めるなんて出来そ

うにないんだよおー！！！）

ここで選択肢が一つに絞られる．．．『何があっても逃げる』それは、どんな事をしてでも…という人間がピンチになると使うような手段である。

周りを見渡す。

扉からの脱出は不可能。そこで逃げる道は…

「窓だ！」

言い駆け出す。

窓を開け放ち縁に足を掛け身を投げ出す。そこでふと気付く。

（ここって2階だよね…？）

「うわぁー！ー！！！！？」

「優！？？」

「優ちゃん！？？」

上から声が聞こえたが、もう何がなんだか分からない。

人は死ぬ直前に過去の思い出が走馬灯のように見えると言うが僕が見たのは1つの光。その光は、せつなくだが優しく全てを包み込んでくれそうな温かな光だった。

気が付くと僕は地面に直立に立っていた。

「あれ…?」

（僕って死んだはずだよな……?）

少なからず自分ではそうなっているはずだが、今は両足で地面に立っている。

そこでバタバタと何かが近づいてくるような音が聞こえてきた。それは僕の近くまでくるといきなり抱き付いてくる。

「優……! 大丈夫なの? 怪我とかしてない? あたし、優に何かあったら…グスッ」

「優ちゃん……ん!」

二人は背中から抱き付いて泣いていた。

「僕は大丈夫だから」

出来るだけ優しく安心させるように語り掛ける。
ところが内心では…

（わぁーーーー!?! どうしよう!?! ぼ、僕また抱き付かれてるよー
ーーーー!?!）

そのあとなんとか二人を宥めて逃げるように部屋に戻った。

第0. 5話 ともだち!?(後書き)

ボクバシヨを読んでいただきありがとうございましたあw

更新が遅くなりすみませんでした(汗)実は作者(自分)が風邪を引いてしまいましたね。学生なんですけど風邪という名の怪物と戦っているわけなんですよ(笑)でも授業中などにも更新出来るよう頑張りたいと思いますw

第1話 入学式は面白くなって良いから平和で過ごしたい（前書き）

今回は短めです。すみませんでしたー！

第1話 入学式は面白くなって良いから平和で過ごしたい

昨日、部屋に戻ってからは外には出ず考え事をしていた。

昨日なぜ自分が助かったのか、あの温かな光は何か…考えてもキリがなく分からない。

（もしかして、僕ってエスパーだったりして…？…何考えてるんだろ、僕…）

「これじゃ、イタイ人じゃないか…僕」

「や、八神さん、どこかお体の具合が悪いのですか？」

「ちょっとね…変な人の仲間になっちゃうかも」

「八神さん！気をたしかに持ってください！わ、私が…なんとかしてみせますから…！！」

「ありがとうございます…グスッ」

「いえ…八神さんのためなら…」

そこで気付く、僕は誰と喋っているのだろうか？と。

恐る恐る声のした方向に顔を向けてみると…

「うひゃあ!?! さ、佐藤さん!?!」

「は、はい!」

僕の斜め後ろには顔を真っ赤にさせた佐藤さんが立っていた。

ここは寮から少し離れたところの道路である。なぜここにいるかという、今日は風華学園の入学式。それで今は登校中?なのだ。

風華学園では基本的に私服ではなく制服である。寮ではジャージでいる事が出来た。でも学校では、そんなことは出来ない。つまり僕は今、ブレザーにスカートという女装した状態。

これまた着替えが大変だったんだ・・・

朝、起きたら亜耶さんが僕の部屋に来た。嫌な予感がしたから抵抗して鍵を開けなかったんだ。そしたら、何したと思う? 神風特攻と同じくらいな事したんだよ!?! 扉を鍵事吹っ飛ばして侵入したと思ったら「おはよう、優ちゃん♪」なんだよ!?! おかしくない!?! これが普通の日常だと思う人がいたら絶対、病院に行く事を薦めるよ!!!!

そんなこんなで散々な朝を迎えた僕はゲンナリ。そんな僕を亜耶さんは無理矢理、拉致? して変な部屋に連れて行き気が付いたら女装

した僕の誕生さ。とうぜん僕はその後抵抗してみたよ。でも…亜耶さんには無駄だった。「かわいいー♪」と何回も言いながら帰っていったよ……僕は頑張ったんだよ…？

おっと、そろそろ話を戻そう。

僕の目の前には佐藤さんが「頑張ります！」って小さく呟きながらガッツポーズしている。

「……とりあえず行こうか…」

突っ込む気力もなくなり、足早に学校を目指す僕であった…

「なんか、みんなこっち見てない？」

学園に近づくにつれ、入学式に出席するであろう真新しい制服に身を包んだ生徒が増えてきた。のは、良いんだが何故か凄く見られている気がする。

（気のせいだね…）

僕は今体育館の真ん中くらいのパイプ椅子に座っている。それでス

テージには、スーツ姿の亜耶さんがいて新入生に対して歓迎の言葉みたいなのを喋っている。でも僕は、そんなの聞いていない。度重なる気疲れと緊張で疲れている僕は睡魔と戦うので必死である。

「…ですから、皆さん素晴らしい学園生活を送っていきましょう。……しかし、入学式からハメを外し過ぎるのはいけませんよ？ 1年 3組 八神優……そんな事だと後でお仕置きしちゃうぞー♪ 優ちゃん？」

僕は一瞬にして睡魔に圧勝し、脳をフル活用して状況を把握しようとした。が、理解したくない、と脳や体が拒否反応を起こしてしまう。

（これは、きっと悪い夢だ……そうに違いない。てゆうか、さっきまでのシリアスな雰囲気はどうなったの！？ 夢だからって、はしやいじゃダメだよ！！ あー！ もう早く起きてくれ僕！）

現実逃避気味の僕は一応確認のため頬つぺたをつねってみる。

（痛い…）

これが現実だと理解し、周りを見渡す。学園長の突然の発言でキョロキョロとしている者や友達と話している者がいる。

（どうやらみんな気がついていないみたいだ…。でも、用心して他人のフリをしておいた方が良さそうだな…）

「優ちゃん！ 無視しないでよー？」

僕は無関心を装うことにした。そして亜耶さんの方をチラッと顔を

上げ見てみる。が、僕はその顔を見た瞬間嫌な予感を感じた。

「無視するなんて酷いなあ…。最近まで一緒にお風呂で背中流しっことか、一緒の布団で寝た仲なのに…。それから…」

「わぁーーーーー！！！！何言ってるんですか！？確かに一緒にお風呂とか入ったり布団で寝たりしましたよ？でもそれは随分前のことでしょう…！………はっ！！？」

気付くが遅い。周りを見渡すと、みんなの視線は僕の方へ…。

（しまった…！）

その時の亜耶さんの顔は、悪戯っ子の笑顔だった。そして笑顔のまま…

「この子が、優ちゃんです♪」

そう言った。

その時の僕の心境は死刑判決がくだされた死刑囚そのものだ。

顔から血の気が引いていくのが分かる。

そしてみんな口々に「あの子が…」とか「朝の…」とか「優「ちゃん！」「！」とか、聞き覚えのある声まで聞こえてくる。

（もう僕の普通で平和な日常ってないのかな…）

そんなこんなで僕の日常は幕を閉じ、非日常というあの学園生活が

幕を開けた。

第1話 入学式は面白くなって良いから平和で過ごしたい（後書き）

えーと、すぐに次もアップすると思うんで楽しみにしてください
ねーw

第2話 廊下を走ってはいけません！(前書き)

この話は連続で続きます。

あとちよつと短いですが、勘弁してください^^;

など聞こえてくる。

(やっぱりアレはやり過ぎたのかな…)

入学式の時、もう自分の日常が崩れ去った僕は半ば壊れかけていた。

(アハハ…もうおしまいだあ…ハハハ)

その時、亜耶さんが再び喋りだす。

「えーと、これから新入生の皆さんが早く仲良くなれるようにゲームをしたいと思いまーす♪」

その言葉で騒がしかった場が静かになった。

「これは先輩達とも早く慣れてほしいので全校生徒でやりたいと思います。新入生の娘達は先輩だからって堅くなんなくて良いからねー。先輩の娘達はちゃんと新入生の娘達を引っ張っていくことー」

「「「まかせてーー♪」」」

亜耶さんの言葉を聞いてやる気満々の先輩方。

一方、僕の方は…

(アハハ…おしまいだあ…)

まだ壊れていた…

亜耶さんの説明によると、先輩二人と新入生三人でチームを作り、バスケ、バレー、サッカー、尻尾取りゲームをやるという事だった。勝ち負けなどは関係なく「仲良くやろう！」だそう。しかし亜耶さんが、それだけで済ませるはずもなく…

「ただしー、優ちゃんは例外だよー？さっき無視した罰として一つでも負けたら…」

後ろを向きガサゴソ何かをしている。

そして、手に何かを持って振り向いた。。。

「これを着て一日学校で過ごしてもらいまーす♪」

その手に持っているのは…

「エプロンドレスーーーーー！！？」

（注・エプロンドレスと言うのは俗に言う『メイド服』である）

僕は、放浪した。

もし僕が負けたら、自分という存在は消えてしまうだろう、と。

（無理無理無理～～～！！！！これって職権乱用ってやつだよなー！！！？しかも、もう亜耶さん完全に僕で遊んでるよね！？）

そこで思い出す。僕は亜耶さんに昔から事あるごとに遊ばれていたことに・・・

（もう良いもん！絶対に勝って亜耶さんの思いどうりになんかなるもんか！）

そこには覚悟を決め、闘志を燃やす一人の少女にしか見えない少年がいた・・・

本人は気付いてないが無意識に胸の前で拳を握り覚悟をきまたその姿は可愛らしく周りの人間は見惚れていたという・・・

第2話 廊下を走ってはいけません！（後書き）

すみません。すぐに更新したかったのですが色々立て込んでいましたので^^;

次回は・・・どうなるか分かりませんが出来るだけ早く更新したいと思います。

第3話 怖いものは怖いんです・・・（前書き）

まだまだ続くよ～
W

第3話 怖いものは怖いんです・・・

今、僕の近くには見覚えがある顔の少女が三人いた。

それは奈津実さん、舞さん、佐藤さんだ。

亜耶さんの合図とともにチーム決めが始まりすぐにこの三人が集まってきた。

（結構人が居たのによく僕の居場所が分かったなあ・・・リーダーでも付いているんだろうか・・・）

奈津実さんの話によると舞さんは足を怪我してしまい今回は見学になるようだ。

が、当の本人は・・・

「応援で頑張るから♪」

と、ちっとも残念がってなかった。

奈津実さんは、いつもどおり「頑張るよー♪」と言っていて、佐藤さんは・・・

「八神さんは・・・私が守ってみせる・・・!」

と何度も呟いて自分の世界にトリップしているようだ。

そんなみんなを見ていた僕はというと・・・

（本当に大丈夫なのかなあ・・・？）

不安と心配で、隅の方でこっそり泣いていた・・・。

「君達ってチームまだ組んでないの？」

僕が隅で泣いていると誰かが話しかけてきた。

それは二人の少女で、一人は背が高く髪が長い。もう一人は背が低く（僕よりは少し高いが・・・）髪が肩のくらいに切りそろえられた少女だった。

しかし、注目すべきはそこじゃない。僕はその少女達を見た瞬間固まってしまった。

（綺麗だ・・・）

今まで見た事がないってくらい美しい少女達が目の前に立っていて僕はただただ見入っていた。

「せ、生徒会長と、ふ、副会長!？」

そんな時、奈津実さんが慌てたように頭を下げた。

「そんなの今日は関係ないわ」

「そうそう。今日は楽しみましょう」

話しが勝手に進むなか、僕は取り残されていた。

「生徒会長・・・？」

「そうです。さっき新入生への挨拶でステージに出ていましたよ?」

僕の呟きに反応した佐藤さんが教えてくれた。

「・・・ごめん。僕覚えてないや・・・」

そう。僕は入学式のほとんどを寝て過ごしていた。だからほぼ何も覚えていないのだ。

「貴女が八神さんね?」

「ひゃい!？」

突然背の高い方の少女が話しかけてきたので思わず声が裏返ってしまった。

すると、周りからクスクスと笑いがおこる。

(うあ~~~~! 恥ずかしいよお!)

「八神さんって面白いんだね」

「いや、あの、これは・・・」

顔が熱い。血が顔に集まり、真っ赤になった顔で慌てている自分が想像できる。

「それはそうと、自己紹介がまだだったよね？」

「あっ、そうだったね」

勝手に話を進めている先輩方。

(なんかもう・・・チームのメンバーって決まってる?)

そう考えていると背が高い方の少女が自己紹介を始めた。

「んじゃ、私から。みんな知ってると思うけど、三年で生徒会長をしている『伊集院遥香』^{いじゅういん はるか}って言います。ヨロシクね」

「同じく三年の副会長をしている『橘^{たちばな}紗紀^{さき}』です」

「あ、あたしは新入生の加藤奈津実です」

「北条舞でーす」

（へえー舞さんの名字って北条って言うんだ・・・）

「佐藤葵です。趣味は・・・八神さんの観察と・・・」

みんなが自己紹介していくなか、佐藤さんだけ最後の方がゴモゴモ言っていて、聞き取れなかった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

何故か、あの三人（奈津実さん、舞さん、佐藤さん、だ。）が、静かになりコチラを見ている。

後ろを振り返ってみる・・・誰も居ない。

ちょっと、右にずれてみる・・・三人（しつこいようだが、奈津実さん、舞さん、佐藤さん、だ。）が、相変わらずコチラを見ている。

三人が見ているのは、自分じゃないかもしれないから試しに左右に動いてみる。

三人の顔は僕の動きにあわせて左右に動く。

今度は走りながら三人の周りを走ってみる……

「! ! ?」

すると、三人は体はそこで固定しているのだが顔はしっかり僕の方から変えようとしない。

（ねえ！あわっておかしくない！？だって360度、顔が回ってない！！？）下手なホラー映画より怖いよ！しかも、ずっと僕を見てる・・・・なんか、周りの人も怖がってるよ！？・・・あつ！子供がコッチを指さして泣いてる・・・・）

「ままだあゝ！ あのお姉ちゃん達怖いよおゝ！」

「あんなの見ちゃいけません！夜トイレに行けなくなっただって知りませんよ？……ままだってね、怖いのよ……」

（・・・・・・。ああいうの初めて見ちゃったなあ・・・・後、ままも怖かったんだ・・・・）

最終的に僕が怖くなって動くのを止めた。

[illegible]

もう口々から擬音を言い始める始末だ……。

何故自分がしつこいくらい（ホラー以上に怖いくらい）に見られて

いるのか分からないので聞いてみる事にする。

「み、みんなどうして僕を見てるのかな・・・？」

そう三人に問う。

「「「はあ・・・」」」

が、溜め息が返ってきたのだった。

（ええ！？なんで！！！？）

第3話 怖いものは怖いんです・・・（後書き）

何処か変な所があったり、もうちょっとこうしたら良いんじゃない
？って言うのがあったら言ってくださいねw
あと、感想もヨロシクお願いします♪

第4話 自己紹介と赤ちゃん言葉!?(前書き)

ちよつと短いですが、すみませんへへ；

第4話 自己紹介と赤ちゃん言葉!?

三人に問う。

「「はあ・・・」」

が、溜め息が返って来た。

（ええ!? なんで!?・・・僕悪いことしたかな?・・・あつ、
なんでだろう・・・少し目から汗が・・・）

「うう・・・」

「わああゝ! 優、そんな顔しないで!!! あたしが悪かったから泣かないでえー!」

「じゃあ・・・なんで?」

「いや、あの、だってさ、優がみんな自己紹介してるのに聞いている
だけだったから・・・」

そう気まずそうに奈津実さんが言ってきた。

話を整理すると、みんながじ順番に自己紹介をしていき自分の番が
きたのに、その本人がいつこうに動きを見せなかったから、だそう
だ。

（ん・・・? だったら、言ってくれても良いよね・・・?・・・あ

っ、でも順番を守れなかった僕も悪い……」

考えてみた結果、自分が悪いという結論が脳内で決定された。

「す、すみませんでしたぁー！」

僕は物凄い勢いで頭を下げる。何度も何度も。

「や、八神さん。そろそろ止めておいた方が宜しいかと……」

いっこうに止めない僕を見かね、佐藤さんが申し出てきた。

「あっ！そうだった！」

（あうー……またやっちゃったよ……もうさっさと自己紹介して話を進めちゃおう！いざっ！……ん？）

下げた頭を勢いよく上げた……が、何かがおかしい。

しかし、それはすぐに分かった。いつの間にか体育館が静まり今日参加していた人たち（進入生や先輩方、そして先生と新入生の親の方々）が、コチラに注目している。

（な、なに！？このなかで自己紹介なくちゃいけないの！？無理無理！僕は目立つのが嫌いなんだ！……十分目立ってるけどさー！）

色々考えている内に痺れを切らした亜耶さんが「優ちゃーん？早くしないと、あーんな事とかこーんな事とかバラしちゃうぞー☆」とか、言い始めた。

でも、

「「「「「あーんな事とかこーんな事って「なに?」「なんです
か?」「?」「」「」「」

んっ?いま色々被ったような・・・?

そんな事はどうでも良い!早くしないと亜耶さんに、ある事ない事・
・修正。ない事ない事言われてしまう!

もうどうにでもなっちゃえーーーーー!

「ぼ、僕のなみやえは八神優でしゅ!よろしくお願いしましゅ!」

あれっ・・・・・・・・・・？

（だぁーーーーー！またやっちゃったよぉーーーーー！？）

僕は勢いに任せて自己紹介したは良いが、うまく発音出来ず赤ちゃん言葉になってしまっていた。

「いまによは、なちでしゅ！」

- など、本人が知らぬ間に色々な人の思惑が飛び交うのだった・・・

第5話 久しぶりにする事は結構楽しいんです♪

oooooooooooooooooooo!

「な、76対0でAチームの勝ち!」

「ちえゝ・・・あゝあゝ残念・・・」

「」「」「・・・」「」「」

「あれっ? みんなどうしたの?」

今は、競技が開始され、そして僕達はバスケの試合をしていた。

あれから亜耶さんが、競技を開始させ1番目はサッカー、2番目はバレー。それでいまバスケットが終わったところだった・・・のは良いのだが、みんなの様子がおかしい。それも1番目のサッカーが終わった後からだ。

おかしい、というのは「面白くて」とかではない。

みんな運動神経が良くとてもじゃないが『か弱い女の子』という感

じは全然しない。じつくり状況を観察していたが、段々つまらなくなってきたので、僕もおもいつきり楽しんだ。

久しぶりに運動をするから、つつい熱中してしまい気が付いたら全勝していた。

だが、やはりおかしい。みんな驚いたような表情をしてコチラを見ている。

「あ、あのさ、優？ ひ、ひとつ聞きたいんだけど……何が残念なのかな……？」

「だって後1点でラッキーセブンだよ？ 凄く悔しい・・・」

奈津実 Side

いま、あたし達はサッカーのミニゲームをしている。

あたしは運動は得意な方なので大丈夫だ。そして、生徒会長と副会長も心配などせずとも、とても運動神経が良い。

今回初めて知り合った佐藤さんは、少し頼りなさそうだったけど実はこの人も運動神経が良くとても信頼出来た。

だが、あたしが1番気になっているのが『八神優』だ。

一目見たときから凄く気になり始めもつと知りたいたも思った。これが一目惚れとでも言うのだろうか？・・・でも、優は女の子。性別的には、あたしとは不釣り合いな関係。

はぁ・・・あたしは、どうしたら良いのかな・・・？

・・・そろそろ話を戻そう。

あたしが1番気になる、その人物は何かを見定めるようにしていてあまり動いていない。

しかし、状況を瞬時に判断し絶妙なパスを出してくれる。だが、やはり自分では動こうとはしない。

（あんなに出来るのに・・・何がしたいの・・・？優・・・）

ピーーーーー！

「やっりいー♪」

（あたしは今夢でも見ているのだろうか・・・）

あたしの目の前であり得ない光景が起こった。

相手チームは予想以上に強くコチラがかなりの点差で勝っていたのに一気に同点まで追いつかれ先ほど、相手チームに逆転されかけた・・・が、されかけたのだ。この部分に注目してもらいたい。

相手チームの人がコチラのディフェンスをかい潜り、ゴールの目の前でシュート体制にはいった。

キーパーは佐藤さん。これまで彼女は素人にも関わらず物凄く速い

シュートも何とか退けてきた。・・・しかし、今回は流石に距離が近い。

誰もが諦めていたなか、それは起こった・・・。

相手チームの人がシュートを放った。ボールはゴールネットを揺らし、相手チームは逆転。

そうこの場にいた人全員が思っていたが、阻止された・・・誰もが・・・味方チームの人でさえ予想出来なかった人物に・・・。

「危なかったあゝ」

その人物は、今までずっと積極的に動かずただ試合を見ていて、相手チームもこの人物に関しては警戒していなかった。

その人物・・・八神優は声に出して「危なかった」と言っていたが、その表情は余裕に満ちていた。

そして一言……

「みんなの実力も分かったし、僕も久しぶりに暴れちゃおう♪」

言い終わると同時に走る。

相手チームも驚いていたがすぐに我に振り返り迎え撃つ。

しかし、迎え撃つその対象……八神優は既に目の前にはいない。

ピーーーーー！

ホイッスルが、なり響きゴールポストを見るとボールがネットを揺らしていた……

第5話 久しぶりにする事は結構楽しいんです♪（後書き）

いつもボクバシヨを読んでいただきありがとうございます。

えっと、なかなか話が進みませんが気長に待っていただけると嬉しいですW感想や何かあったら言ってくださいね♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2272c/>

ボクのイバシヨ

2010年10月11日05時00分発行